

「暗黒の中国」が歩む道

中華人民共和国は解体過程に入った。

「ポスト鄧小平」状況下でもう一つの革命が起こりつつある

中嶋 嶺 雄

(東京外国語大学 教授)

中ソ会談の舞台裏で

六月四日の北京の「血の日曜日」は、戒厳令公布の延長線上で発生した大惨劇であった。そこでまず戒厳令についてだが、それが今回戒厳令が発動された背景には、中国政府内部におけるきわめて深刻な権力的角逐があった。

中国の威信を根本から傷つけるような行為を、中ソ首脳会談を中継するために世界中から集まっていたジャーナリスト

の面前でやらざるを得なかったかということ自体、中国当局がいかにせつば詰まっていたかを物語っている。

そこで戒厳令が発動されるまでの経緯を説明するために、まず今回の中ソ首脳会談の非常にドラマチックな展開を分析してみたいと思う。

五月十五日から四日間におわたって行われた中ソ首脳会談は、そもそもゴルバチョフ書記長訪中の歓迎式典を天安門広場でやろうとしても、それができず、急遽空港でやらざるを得なかったというハブ

ニングから始まった。そして、翌日十六日、午前十時二十分から、延々二時間半にわたって行われた、鄧小平・ゴルバチョフ会談では中ソ和解の三条件を克服し三十年間にわたる対立抗争の歴史にピリオドが打たれた。しかしこの「世紀のサミット」に対して、広場集まっていた

学生や市民はどういう評価を下したのか。「ゴルバチョフ書記長に比して、何と鄧小平氏は時代錯誤であるか。もう老害ではないか。おまえは一体何者だ、鄧小平、引き下がれ」と叫んだのであ

る。これは、そもそも四月二十六日に、民主化運動を求める学生たちを、「動乱」をたくらんでいると決めつけた鄧小平にとっては、まさに彼のレゾンデートル



世界を震撼させた中国

(存在理由)の根拠を真っ正面から批判されたも同じことであった。

彼は国家の元首でもなければ、首相でもない。そして党の総書記、最高指導者でもない。そんな鄧小平が中ソ首脳会談をすべて牛耳ったということは、中国がまさに皇帝国家であり「人治」の国であることを明らかに見せつけた。それに対し学生たちは、法に基づく政治、すなわち「法治」をやれと言ったわけだから、鄧小平氏にとっては一番痛いところを突かれたことになる。

ところが、その日の午後、ゴルバチョフと李鵬との間で政府レベルの会談が行われたあと、夕方から趙紫陽・ゴルバチョフ会談が行われたが、この中で、冒頭、趙紫陽は、非常に衝撃的なことを言ってしまった。つまり、鄧小平は、一昨年の十三期中全会以来、引退したはずなのに、重要事項の決定はすべて鄧小平氏が行うようになってきていると、NHKで衛星放送の解説を担当していた私は、まさにリアルタイムでその場面を見ていたが、

これは大変なことを言い始めたと驚いた。なぜなら、中国共産党においては、鄧小平のイニシアチブによってつくりだされた現行の党規約で、「いかなる個人も組織の上に君臨することは許されない」と、

第十六条に規定してある。にもかかわらず、彼はまさに超法規的な存在として君臨しており、趙紫陽氏と言えども、動きがとれないんだということを暴露したのである。このように重大な秘密決議を、趙紫陽はともあろうにゴルバチョフ氏との会見を通じて、世界にそしって、テレビを見ていた学生たちに洩らしてしまったのだ。これを聞いたとき、ゴルバチョフ書記長は、一瞬とまどい表情を見せたが、そんな書記長を前にして、

趙紫陽は、非常に挑戦的にその言葉を吐いている。これは、経済改革・開放の混乱を招いた責任者として、党内で孤立し始めていた趙紫陽が、ゴルバチョフ訪中と、天安門広場での民主化要求デモを背景に、一挙に態勢巻き返しをはかろうと

したものと思われる。

命令無視の戒厳軍

その趙紫陽氏の意味は、一時的にはかなり功を奏した。デモはますます高揚し、翌日ゴルバチョフ書記長は、人民英雄記念碑に献花もできないまま、やがて十八日に北京を去ることになる。そしてその日の深夜から十九日の早朝にかけて、学生たちと会話した李鵬首相が、学生たちと決裂したのに対し、趙紫陽は、まさに感涙にむせんで、「ここに来るのが遅過ぎた、あなた方の要求は当然だ」と表明して、学生たちとの歩み寄りをはかった。

しかも、党中央において、改革派官僚の多い國務院をはじめ、党中央軍事委員会、人民解放軍北京軍区、中央党学校、その他の部署に、民主化に呼応する動きがあった。中でも、ゴルバチョフ訪中の安全を期するように命じられていた首都警備の第三十八軍が、ゴルバチョフ

帰国後、学生の鎮圧に抵抗したということは、鄧小平、李鵬らにとって、極めて憂うべき事態であった。

そこで、追いつめられた鄧小平は、十九日から、武漢に飛び、そこに各軍区の代表を集めて叱咤激励する。そして楊尚昆の私兵とも思われる第二十七軍という部隊に北京の状況がわからない地方の、しかもかなり質の悪い兵士たちを加えて、北京に導入したのである。

そういった形で鄧小平は、一挙に学生たちを鎮圧しようと画策し、十九日夜八時から開かれた党中央拡大政治局会議では、趙紫陽、胡啓立ら民主化に呼応しようとしていた幹部を軟禁状態に陥れ、引き続き十時から党中央軍事委員会を開いて、ついに戒厳令の強行を決定したのである。

ところが、戒厳令施行にもかかわらず、六月三日から四日にかけての血の日曜日までは、二週間近くも経過してしまっただけで、しかも戒厳令というのは、施行したらすぐ軍を導入して、一斉に鎮圧しなければ

いけないにもかかわらず、それができなかったということは、ここにもきわめて深刻な状況が内在していたのである。やはり三十八軍などが大いに抵抗していたし、聶榮臻とか、徐向前、楊成武といった軍の長老たちも、鄧小平、李鵬らに批判的であった。更には、党中央の老幹部の間にも、鄧小平のやり方がひどすぎるといふ意見が拡がり、事態はますます鄧小平らの思惑と逆の方向に動いていったのである。

だが、戒厳令を布いたにもかかわらず、学生たちを鎮圧できなかったということは、大変な威信の喪失であり、この事態にますます怒り狂った鄧小平、李鵬は、第二十七軍という、楊尚昆の私兵を導入する。

しかも兵士たちには北京で流行っている伝染病の予防注射と称して興奮剤を打ったといわれており、一方では天安門広場に集まっている連中が大変悪辣な破壊分子であるという情報まで流して、やがて六月四日という日を迎えたのである。

まさに当局の側いかに余裕がなかったか。

しかもその日は、三千名ぐらいしか残ってなかった天安門広場の学生を鎮圧するのに、機甲化部隊、装甲車や戦車を含めた十万の兵力を導入し、北京の近郊には合計三十五万の兵力を集めていたという。三千名から数千名の学生を鎮圧するのに、なぜそんな兵力が必要であったのか。これは三十八軍を中心とした軍の中に、この機会を利用して一挙に李鵬、鄧小平を打倒しようというような動きがあったためだと思われる。あるいはそこまで目的意識を持っていなかったにせよ、かなり抵抗したのであろう。それが証拠には、二十一日に、三十八軍の副軍長が自殺し、同時に軍長が更迭されるといふ事件が起こっている。

以上そのことを考えると、戒厳令の施行、そしてその後の流血は、まさに学生を鎮圧するというよりは、党中央においていかに深刻な亀裂が入ってきたかというを示す結果なのだ。

軍同士での対立はあったのか？

ところでこの武力鎮圧後の混乱の中では、第二十七軍と三十八軍の対立説が、さかんに報道されていた。南苑の空軍基地にある空挺部隊をめぐって、第二十七軍との間に衝突があったとか、三十八軍の司令官が傷を負ったために、そこで衝突があったとか……。

これらの情報はいずれにしても、必ずしも確かめられていない点があるが、何らかの対立があったのは事実のようだ。というのは、三十八軍は、もともと胡耀邦の追悼をやるうとしていた軍であるうえ、鄧小平を追放し、五四運動を記念しようというようなことを言っていたという壁新聞も、北京大学に貼られていたからだ。北京軍区がなかなか戒厳令を支持しなかった背景も、その辺にあるのだろう。

つまり、内戦状態があったという情報は、少し行き過ぎだったとしても、鄧小

平が武漢へ行ってから、強行突破の方向で事態の収拾を図ろうとしたその中には、軍内のさまざまな角差があったのだという推測がつく。

しかも楊尚昆一族のような、つまりは総参謀長が自分の弟であるとか、総政治主任が自分の娘婿であるとか、そして二十七軍の軍長は、これは孫であるとか……、こういったいろいろな問題の裏で、(三十八軍という精鋭部隊に比べて)結局非常に前近代的な、第二十七軍という部隊が主役を演じたのである。

このことよって、ちょうど毛沢東が、北京を脱出して文化大革命を巻き返した時、林彪の軍隊に助けられて林彪に借りをつくったと同じように、いま鄧小平、李鵬は軍隊に大変な借りをつくってしまった。そのため当分は、軍がものすごく横暴になってくるであろう。

あらゆる報道機関が軍事管制下にある中で、恐怖政治が行われ、密告を奨励して逮捕・摘発、見せしめの処刑がおこなわれている。世界がどう動くだろうと、まさ

にそれを目的として断行するといふ自棄自棄の状況が、今もなお続けられているのである。

孤立化する中国

そのような中で、米大使館へ保護を求めた反体制物理学者、方励之氏夫妻の問題や一連の事態をめぐって、米中関係は急速に冷却化しようとしている。まさにアメリカは、一人の知識人を救うために、長い間かけてきた外交関係よりも一箇の人権というものがいかに大事かという毅然とした態度を見せつけ、非常にアメリカ的なデモクラシーの尊厳と偉大さを示した。同時に、アメリカのほかに、フランスのミッテラン大統領などは「中国に未来はない」と言っているし、イギリスのサッチャー首相も「暴逆をきわめる」と発言している。もともと鄧小平氏とサッチャー首相は香港の返還交渉をめぐって非常に息が合ったはずなのに、そこまで強い姿勢を示したのである。

ていざるを得ないという状況がいつまで続くというのか。「鉄蹄」によって支えられている政權、しかもポスト鄧小平は目の前に迫っているという状況では、その前途は非常に不安定なものである。

問われる日本の対中外交

その中で、注目されたのが、日本の対応であった。ところが宇野首相は、就任早々の演説でも、むしろ中国の事態が平定されかけたことに胸をなでおろすというような態度を示し、日本は戦争責任の問題があるから、西側諸国と違ふ対応をとるべきだということさえ発言している。

実に奇妙な逃げ口上である。しかしながら、そんなきれいごとは、もはや通用しない。

むしろ世界の中で、日本は結局人権とか、民主主義とかいうことについては、全く純感で、野蠻な中国と同じではない

さらにカナダは、大使を召喚し、オーストラリアが、ベルギーが、E.C.というように西側諸国すべてが、今や中国に対して非常に敵しい姿勢を示している。

いま、中国の立場をむしろ認めているのは、北朝鮮、ルーマニア、東ドイツというような、ソ連の学者たちでも眉をひそめるような、硬直した独裁体制の国だけである。ゴルバチョフ書記長のソ連も、中ソ和解をなし逃げたばかりなので、非常に慎重な対応を示してはいるが、民主化には賛成しているのであり、「学生たちの運動には関心を持ってはいる」という言葉で、強い共感を示していた。しかも、このような流血の事態をもたらした恐怖政治を断行するということは、いまのソ連のベレストロイカや、上からの改革を進めているゴルバチョフのやり方と対極的であるため、中ソ和解を成し逃げたばかりだというジレンマはあるけれども、当面、中ソ関係の発展は一時凍結されるであろう。

そうすると、西側諸国の強い態度にどうか、結局エコノミックアニマルにすぎないではないかという批判を受けてしまっている。そして、西側の世論に合わせるために、第三次円借款の凍結という、今さらながらの制裁。これではもはや遅過ぎた。もっと早く、流血の事態が起こる前に、それをきちんと言うべきだったと思うのだが、いまさら言えば、今度は鄧小平、李鵬体制の中国から指弾されよう。さらには多くの中国の民衆までも敵に回ってしまった。つまり三重の意味で大きな誤りを犯してしまった訳だが、そういう日本の外交的体質というものが、いま深刻に問われているのではないだろうか。

これは私が従来から言っている「対中国位負け外交」。中国には、教科書問題、靖国問題、光華寮の問題、いつも内政干渉一步寸前どころまで言われても、御無理ごもつとも、頭を下げて、位負けして、謝罪外交をして、経済援助をふやしてきた。

そうして当面を糊塗してきたという、

し、ソ連あるいは東欧諸国というカードをちらつかせる中国も、思惑どおりに事は運ばない。東欧諸国で中国の行為を認めているのは、前述の東ドイツやルーマニアぐらいであって、あとは、ハンガリーもポーランドも、非常に批判的な見解を示している。ハンガリーも今や、民主化、あるいは複数政党政制の実現を進めようとしているし、ワレサの率いる連帯が、選挙で勝利しているような体質を持っているポーランドなども当然中国を受け入れられないはずである。そういう意味からも、当然中国は国際的に孤立化するであろう。

ところが国際的に孤立化しても、いまの中国は、そんなことを考慮する余裕がない。まさに徹底的に民主化を鎮圧することによって、強行突破をしなければならぬ。なにしろ中国共産党は、全中国人の大部分に、圧倒的な反感と恨みを買ってしまったうえ学生、知識人たちからも、もうまったく信用されていないのだ。そういう事実の中で、強行突破し

日本の外交的体質が実に偽善的なものであったということが、いまさに問われているのだ。

日本の多くの国民は、戦争責任の問題は全く別個のものだと思っているし、事実われわれも、この血塗られた政權、恐怖政治を行おうとしている現在の中国の当局に対し、何ら負い目はないはずである。その辺のところをきちんとすることが、それこそけじめではないのか。そのけじめが全くつかない政權の体質を暴露したと言えよう。

日本は中国にとって経済的な面では非常に強い影響力を持っているが、同時に中国は一番大事な友好国でもある。それなのに友好国がこんな盲目的なジレンマに陥るまで、なぜ言うべきことを言わなかったのか。

何らの外交的努力もせずに、ただ右往左往し、周章狼狽していた日本の外交当局にも大きな問題があった。今後は対中国姿勢を、根本に考え直していくことが必要となるであろう。

経済往来

AUGUST

自民党は死地に入った! 伊藤 昌哉

“新ヤルタ体制”に喘ぐ日本経済 高橋 乗宣

転換する日米「覇権」の構図 坂本 正弘

一つの欧州と東西ドイツ 武田 弘毅

急浮上するアジア安全保障問題 浅井 基文

“暗黒の中国”が歩む道 中嶋 嶺雄

新時代の「日本の人物」②

武村正義 二一世紀の
世界政治を語る

〈経済往来の昭和史(8)〉

資本主義問答 小林一三/直木三十五

続・老記者の置土産⑫

緑陰に人物を語る 大草 実/萱原宏一/下村亮一

8月号

連載スキな人 キライな奴 小島直記